過去に戻ったと思ったらなんか違う

クソザコブロッコリー先輩BB

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

強敵リトルギガントに打ち勝ち、ＦＦＩ優勝を成し遂げたイナズマジャパン。

そのメンバーの１人である白撫　亜嵐（しらなで　あらん）はあまりの疲れからか、不幸にも優勝カップを１度も触らずに気を失ってしまう……。

次に彼が目を覚ましたのはイナズマキャラバンの中であった。

彼が戸惑いを見せる中、イナズマジャパンのキャプテン円堂が言い渡した言葉とは……。

※転生要素がいらなくね？と気づいたので８／３０に転生タグは消しました。

目次

どこ……ここ……？ ―― 1
響木監督からの提案 ―― 5
ＶＳバルセロナオーブ　前編 ―― 9
ＶＳバルセロナオーブ　後編 ―― 13
検査入院 ―― 17
スカウトと強化委員 ―― 20
脅威の侵略者さん!? ―― 24
昔馴染みとの再会　前編 ―― 31
昔馴染みとの再会　後編 ―― 36
サッカーバトルだ！　タッチペンを抜け！ ―― 44
前の世界の記憶とコネは使いよう ―― 49
ＶＳ星章学園　前編 ―― 55
ＶＳ星章学園　中編 ―― 58

どこ……ここ……？

『試合終了！　イナズマジャパンｖｓリトルギガントの決勝戦は激戦の末、３対２でイナズマジャパンの勝利だぁ！』

「勝った、のか……？」

現実味を帯びない結果にオレは頬を抓る。よく見ればＤＦの壁山も同じことをしている。

「亜嵐、オレたちが勝ったんだ！」

隣にいた基山ヒロトが興奮を抑えられていない顔で蛍光板を指さす。

そこには３―２と書かれていた。

３の隣にはイナズマジャパンのエンブレムが。

それを見てオレの緊張の糸は切れたのか、身体が一気に重くなる。

「ハハッ、やったぜ」

「亜嵐!?」

重さを支えきれなくなったオレの身体は地面へと座り込む。

「おい亜嵐、大丈夫か？」

側に寄ってきた円堂もオレの様子を見て心配しているようだ。

「大丈夫なわけ、ないだろ……。この試合、１回も足を止めてないんだぜ？　流石に疲れた」

こんなに足を動かしたのは後にも先にもこの試合だけかも。

体力に自身のあるオレでも、もう足を動かしたくない。

「ああ、そうだな。この試合で１番足を動かしてたのはお前だ、亜嵐」

何を言ってやがりますか、コイツ（ヒロト）は。

この試合で２得点も決めやがって。ぶっちゃけめちゃくちゃ羨ましい。

あわよくばオレも点を取りたかった。いや、でも流石にシュートを狙いに行く余裕はなかったなぁ。

はぁ……。

「いやぁー、本当に疲れた」

そのまま地面へと寝転ぶ。

今は疲れたという言葉しか口から出てこない。
「本当に大丈夫か？」
「大丈夫じゃないなぁ、これは。マジで疲れた」
「おいおい、これから表彰台に登るんだぜ？」
「その体力すら残ってない」
なんか眠くなってきたな。
「悪いけど、表彰台に登ることできそうにないや」
「おい、亜嵐しっかりしろ！」
「ごめん、疲れたからこのまま寝るわ」
「ふゆっぺ、担架持ってきてくれ！」
オレの様子に仲間たちは大慌てしているみたいだ。
ごめんな、みんな。迷惑かけちまって。
「おい……ア……！」
「しっ……ラン……！」
「たん……っ……くん……！」
段々と声が遠のいていく。
そしてオレの意識はぶつりと途切れた。

○○

「……ラン！」
ん……？
「……アラン！」
なんだ……？
「……おい、アラン！」
この声、染岡か？
「起きろよ、アラン！」
次第に染岡の声が鮮明に聞こえてくるようになり、意識も戻っていく。

「……聞こえてるよ」
オレはそう言うと同時に瞼を開ける。
光が目に入り、眩しい。
「ならさっさと起きろってんだ。おい円堂、亜嵐が起きたぞ」
「悪いな染岡」
まだ寝惚けてるけどやっと周りが見えるようになってきた。
キャラバンの中だろうか？
「亜嵐、まだ優勝カップ持ってなかったよな」
「そうかも」
確かピッチの上で寝転んでそのまま気を失った気がするし。
「ほら」
近くにいた円堂から優勝カップを渡される。
ん？
「……おい、これってフットボールフロンティアの優勝カップじゃないか？」
「何言ってるんだ？　当たり前だろ」
「何言ってんすか白撫先輩？　もしかてまだ寝惚けてるんスか？」
オレの口から出た率直な疑問に対し、風丸と壁山がそう言ってくる。
嫌な予感がした。そう感じると急激に背筋が凍り、意識が強制的に覚醒する。
「おいおいおい……。なんの冗談だよこれは……!?」
確かに持っていたのフットボールフロンティアの優勝カップだった。
すぐさま、円堂を見た。
「？」
そこには、雷門中のジャージを着て首を傾げている円堂がいた。
周りを見れば、豪炎寺や鬼道。居ないはずの一之瀬や土門、半田たちまでいる。
それも雷門中のジャージを着て。
前を見れば、木野、雷門、音無のマネージャー陣が心配そうにオレ

を見ている。そこに冬花の姿は見えない。
そのすぐ近くにいる響木監督もオレの方を見ていた。
久遠監督やヒロト、吹雪はどこに行った……？
この中にいるべき人間がいない。
「疲れてるのか？」
「体力自慢の白撫が珍しいな」
豪炎寺と鬼道が珍しそうにこちらを見てくる。
「いや、大丈夫だ。ははっ……、壁山の言う通りまだ寝惚けてるのかも」
そう言いながら静かに席へと座る。
手元にあるフットボールフロンティアの優勝カップをまじまじと見つめ、隣にいる染岡へ受け渡す。染岡は嬉しそうに優勝カップを手に取る。
ここまでの状況を整理し、状況把握を行う。
ヒロトや吹雪といったイナズマジャパンのメンバーではなく、一之瀬や土門、半田がいる。つまり雷門イレブンが揃っている。
服装は雷門のジャージ。
そしてここにある優勝カップはフットボールフロンティアインターナショナルではなくフットボールフロンティアの物。
……
…
まさかとは思うが……。
「おい円堂」
「なんだ？」
「オレたち、さっき世宇子中と戦って、優勝したんだな？」
「なんだよ改まって。そうだぜ、オレたちフットボールフロンティアで優勝したんだ！」
その言葉を聞いた途端、冷や汗が止まらなくなってきた。
マジか、過去に戻ってきたのか。

響木監督からの提案

とりあえず夢じゃないかの確認だけしておこうと思い、頬を抓る。
（痛い……）
フットボールフロンティアインターナショナル決勝戦終了後に頬を抓ったが、それと同じように頬は痛くなるだけだった。
キャラバンから見える外の景色を一瞥してから、隣にいる染岡に気になったことを聞いた。
「なぁ染岡」
「あん？」
「今って雷門中に向かってるんだよな？」
「当たり前だろうが。さっき話聞いてなかったのかよ」
「トイレ我慢しててそれどころじゃなかった」
「おいおい……。お前は相変わらずだな」
適当はぐらかしてみたけど上手くいくもんだな……。これもオレの……。
「っておい、相変わらずってなんだよ」
「相変わらずは相変わらずだろ」
「だからその相変わらずってなんだよって聞いてんだよ、ヤクザ顔」
「な!!　や、ヤクザ顔だぁ!?」
「おい、お前ら。もう雷門中に到着するぞ」
染岡と言い合いをしていると、前にいる響木監督がそう言ってくる。
っと、そうだ。雷門中と言えば、フットボールフロンティアを終えて雷門中に帰ろうとしたら校舎が倒壊していたんだった。エイリア学園の手によって……。
「またヒロトたちと戦わないといけないのか……」
お日さま園の奴らとは切っても切れない縁がある。言ってしまえば家族のような存在だ。だからまた戦わないといけないと思うと心が痛む。
だが、何故かオレはこの時間に戻ってきたんだ。少しでも早くお日

さま園の奴らが解放されるように立ち回らないと。
（オレの記憶通りなら最初は緑川、いやレーゼと戦うはずだ）
オレはエイリア学園と戦う心構えをしておきながら、雷門中に到着するのを待った。

○○

……なんて心構えをしていたんだが、いざ到着してみれば雷門中は健在。
生徒たちはオレたちの到着を待っていたと言わんばかりに歓喜の声をあげている。
（ん～???）
次々と雷門イレブンがキャラバンから降りていく中、オレはこの状況に対し困惑しきっていた。
（おかしい。あの緑川（レーゼ）が遅刻するとは思えんし……）
「白撫、降りないのか？」
「あ、ああ。ごめん鬼道、今降りるよ」
（こっちの着く時間が早かったのか？　何にせよ、警戒は怠らずにしておくか）
キャラバンから降りるなり、雷門中の生徒たちから見つからないようにオレはサッカー部への部室を目指す。
「なにやら浮かない顔をしているな」
「お前がそんな顔をするなんて珍しいこともあるもんだ」
「ん？　鬼道と豪炎寺か」
お前らも部室に行くのか。
まぁ生徒たちに囲まれて持て囃されるのはキャラに合わない気もするしな。
「真剣な顔してた？」
「ああ。いつにも増して真剣な顔つきだ」
「なんならさっきの試合よりも真剣な顔つきだ」
「そんなに!?」

でもまぁ、規模を考えれば当然かもしれないな。
この2人には伝えておいた方がいいかもしれない。豪炎寺にいたっては妹さんが人質にされるしな。
「なぁ――」
「円堂もこっちに来たみたいだな」
「おい、円堂！」
2人が声をかけた方を見れば、確かに円堂もこっちに逃げて来たみたいだ。
「それで、何か言いかけてなかったか？」
「いや、なんでもない。また後で話すよ」
「そうか」
ぶっちゃけ考えてみれば、言っても狂言としか受け取れないだろう。
豪炎寺からは殴られそうな気もする。
キャラバン内でのサッカー部の奴らの反応を見る限り、この頃からオレはひょうきんなキャラクターだと定着しちまってるようだし。
……これも日頃の行いか（落胆）
鬼道と豪炎寺、円堂に続いてオレも部室の中へ入る。
各々が椅子に座る中、オレはタイヤの上へと座った。入部してからここがオレの定位置になっている。
「それにしても帰ってきた途端、みんなすげー喜んでるな」
「最初の頃はあんなんじゃなかったのにな」
「あはは、確かに」
入部初期からいるオレと円堂だからこそ分かる話だから、豪炎寺と鬼道には少し共感しづらいかも。
雷門中のほとんどの奴らが手のひらグルングルンだ。
「しかし、これで俺たちは次のステップに進まないといかん」
「次のステップ？　フットボールフロンティア連覇か？」
「それも重要だが、それじゃないんだろ鬼道？」
「ああ」
どうやら鬼道と豪炎寺は同じ考えらしい。

オレと円堂はイマイチ、ピンときてない。
「世界だ」
豪炎寺がそう言い、隣にいた鬼道もニヤリと笑った。
「世界……。うぉぉぉお!!　世界か!!　」
それを聞いた円堂は立ち上がり、目をキラキラさせる。
「世界……、世界か……。まぁ普通は世界だよな。宇宙人の前に」
「白撫、それは非現実的すぎないか？」
お、そうだな（知らんぷり）
「お前たち」
突然部室のドアが開いたと思ったら、そこには響木監督がいた。
「早速だが、フットボールフロンティアを制したお前たちに提案がある」
そう言うと響木監督は不敵に笑った。
「「「えっ???」」」
優勝パレードの提案ですかね？（すっとぼけ）

VSバルセロナオーブ　前編

響木監督の提案から早いこと1週間。
オレたち雷門イレブンはフロンティアスタジアムにいた。
響木監督の提案とはスペインのバルセロナオーブというチームとの親善試合のことだった。まぁ、うちのサッカーバカキャプテンが断るわけもないので試合は行われるのである。なんなら用件を言い終わる前に了承してた。
オレは柔軟をしながら近くにいた鬼道に話しかけた。
「聞いたか？　今日のチケット秒で売り切れたらしいぜ」
「世界をまたにかけた試合だからな。注目度も高いんだろう」
「これテレビでも放送されてんだろ？　うーん緊張してきたなぁ」
「見た感じ、そんなこと無さそうだが」
「あ、バレた？」
「まったく、お前という奴は……」
これはオレなりに緊張をほぐしてやろうという気遣いだ。
「ま、そんなに緊張すんなって」
「……バレてたか」
「だってマント、表裏逆じゃね？」
「なに!?」
オレの指摘に鬼道は慌ててマントを確認する。
いつもは冷静沈着で頼れる司令塔の鬼道さんもこの有り様。他のメンバーは言わずもがなだろう。（もちろん、円堂は除く）
ここは世界の戦いを経験したオレがリードしてやらねばならんな（ドヤ顔）
「オレたちの、いや日本のサッカーってもんを見せてやろうぜ」
「ああ」
マントの表裏を直した鬼道は力強く頷く。
「よーし、お前ら集まれ！」
円堂の呼びかけで雷門イレブンは円堂の元へ集まる。
「それにしても、今の鬼道はダサかったなぁ。写真撮っておきたかっ

た……」
「白撫、聞こえてるぞ」
「あ、いっけね」
てへっ、と舌を可愛らしく出して誤魔化しておいた。（オエッ）

○○

円陣を組み終わり、選手たちはピッチに立つ。
今回、オレのポジションはリベロ。運動量の多いオレが最も得意とするポジションだ。
「さてと、バルセロナオーブの奴らがどれほどなのか見せてもらうとするか」
主審のホイッスルを吹くのを皮切りに、試合は始まった。
豪炎寺と染岡、一之瀬の３人がパスを回し前線へ攻め入る。
（しかし、バルセロナオーブの奴らの動きが妙だな……）
こんな簡単に攻め入れるものだろうか？
なんだか初めての帝国戦を思い出した。
だがしかし、せっかくの得点チャンスだ。
「そのまま決めちまえ豪炎寺！」
一之瀬から受け取ったボールを豪炎寺は宙へと蹴りあげる。
「ファイアトルネード！」
豪炎寺が得意とする必殺技だ。
決まったかと思われたシュートだが、相手のキーパーは片手で、しかも人差し指だけで止めてみせた。
いやいや、突き指しちゃうだろ。
オレはそれを見て呑気にもツッコミを入れてしまいそうになる。
キーパーは止めたボールをそのまま豪炎寺に返し、挑発してきた。
主審、あの挑発行為って良いんですか（憤怒）
「円堂！」
「悪いけど頼んだ！」
「おう行ってこい」

鬼道の呼びかけで円堂は前線まで走っていく。その代わりにオレがゴール前の位置に移動する。
きっと現時点で最強の必殺技であるイナズマブレイクを使うのだろう。
「ふっ！」
鬼道が力強く蹴りだし、パワーを纏ったボールを3人で同時に蹴り出す。
「「イナズマブレイク!!」」
しかし雷門最強の必殺技は呆気なく止められる。
「なん……だと……！」
「あんな止め方……！」
同じキーパーである円堂も思わず驚愕してしまう。
無理もない。相手キーパーが高くジャンプしたかと思えば、そのまま落下して足の裏で止めたのだ。
もう無茶苦茶だよ……。
相手キーパーは味方である１０番ににボールを渡した。
とうとう攻めてくるってか……！
「ＤＦ、円堂が戻ってくるまで持ち堪えろよ！」
しかし残念かな。オレの指示も虚しく、相手のパス回しに翻弄され簡単に突破されてしまう。
「させるかよ！」
相手の１０番と最終ラインにいたオレがマッチアップする。
「……ほう」
オレを見るやいなや、感心したかのように言葉を漏らす。
「……なんだよ」
「君は他の選手とは違うようだな」
「言ってろ！」
隙と見たオレはボールを奪い取ろうとするが、相手の１０番は瞬時にボールを浮かせ、オレを抜き去る。
（なっ!?　スピードが速い……！　それになんだこの感覚……！）
まさかのオレですら目で追うのがやっとのレベルだ。しかもここ

にきてオレは自分の身体なのに自分の身体じゃない感覚に戸惑いを覚える。
（まさか……）
１つの仮説が頭の中を過ぎるが、頭を左右に振って考えるのをやめる。
今は目の前の試合に集中するべきだ。それにまったく対応できないという訳ではない。
オレは急いでゴールに向かう。
相手はきっと円堂がゴール前の位置に戻るのを待っている。そこを利用すればボールは取れるはずだ。
（やっぱりそうだよな！）
案の定、相手は円堂がゴール前に戻って構えた瞬間にボールを蹴り出した。
それと同時にオレも横に飛ぶ。
「よっと……。セーフだぜ……！」
「助かったぜ亜嵐！」
相手のシュートに合わせて横に飛んだオレは、足の裏とゴールポストで強引にボールを挟む。
これで得点にはならない。
これには相手もびっくりしたのか、目を見開いている。
「なあ」
「分かっている」
それを見た相手が何やら話しているが距離が遠くて聞こえなかった。
とりあえず前に大きくクリアして反撃開始としますか！

ＶＳバルセロナオーブ　後編

この前反撃開始と言ったな。アレは嘘だ。（玄田哲章ＶＯＩＣＥ）
もう何度繰り返したかわからないが、誰かがボールをセンターエリアに置く。
みんなの士気はだだ下がり。しかし完全に諦めてる訳ではない。
オレは自分の定位置につく。
そのついでに隣にいる鬼道に声をかけた。
「お疲れだね鬼道さん」
「お前は全然疲れて……それもそうか……」
オレの状態を見て鬼道は察したのか、言葉は続けなかった。
恐らく雷門全員、いやこのスタジアムにいる全員が試合状況を見ればすぐ分かるだろう。
何故かオレはバルセロナオーブの選手に３人もマークされている。
（なんでこうなっちゃったんすかねぇ）
スタジアムの電光掲示板を見る。
今は後半残りわずか。そして得点差は１１点差。もちろんこっちは０点である。
日本一である雷門イレブンでも海外の強豪には手も足も出ていないのだ。オレ以外の選手はみんなスタミナ切れ寸前である。
そしてオレはさっきも言ったように３人にマークされている。
そうなるとどうなるか。言わずもがな、何も出来やしない。
パスは来なければ、ボールをプレスしに行くことすらできない。
まぁ相手側の思惑なんざだいたいわかる。
自惚れではないが、オレが唯一バルセロナオーブのゴールを脅かす存在だからだろう。
サッカーは１人で試合に勝てるスポーツではない。それが強豪相手なら尚更。しかし相手は雷門が勝てる確率を完全に潰してきてるのだ。
雷門のキックオフで試合が再開されるが、すぐにオレの元へ３人の

マークは寄ってくる。
マークを振り切ってボールを貰いにいけよ！　という声も上がるだろう。
まぁ確かにできないこともない。世界大会を闘い抜いたオレなら造作もない。
しかしこの身体は全国一になった直後の身体だ。
世界大会のノウハウがあっても、身体が追いついて来ない。
さっきオレが感じた違和感はそれだった。
（エイリア学園と闘った後の身体ならともかく、これじゃなぁ……こりゃ鍛え直さないと駄目だな）
二度手間というかなんというか……。損した気分である。
「けど、このままやられっぱなしっていうのもムカつくよな」
それにマークされて何も出来ずにストレスが溜まっている。
オレの独り言が理解できないのか、マークについている3人は首を傾げる。
あ、そっかぁ……（言語の壁）
試合時間も残りわずか。次に点を決めたら終わりそうだ。
「一泡吹かせるための反撃、行きますか！」
そう言うと同時に、オレはすぐさまマークを突き放す。
「なっ!?」
相手は驚いて動けない。
そりゃそうだろう。だって自分の陣地に向かって走っているのだから。
流石にどう対処すればいいか迷うはずだ。
そして相手は10番の指示でオレを追うことをやめたようだ。
「亜嵐どうしたんだ？」
ゴール前まで戻ったオレに円堂は声をかけてきた。
「あの仏頂面に一泡吹かせようと思って」
「？」
そう言ってボールの方を見れば、その仏頂面の10番がボールを持っていた。噂をすればなんとやらだ。

オレがしたいことはただ一つ。シュートブロックだ。なんならそのまま相手ゴールに向かってカウンターシュートする。
世界大会の技はまだしも、エイリア学園との戦いで覚えた技なら使えると思っての作戦だ。
すると、相手の１０番はボールを少し浮かせた。
「まさかシュート技か!?」
時間も残り僅か、海外との差を見せつけるためだろうか？
想定外ではあるがそっちの方がやりがいがある！
「ダイヤモンドレイ」
何度も蹴り込まれたボールが雷門ゴールへと突き進む。
「やってやるぜ！」
自分を奮い立たせ、風を起こすかのように片手を振るう。
すると、眩い白い光が勢いのついたボールを絡めとり、オレの周りをぐるぐると回り始める。
「ハァァァ！」
難しい技だからそれなりに集中力と技量が求められるが、なんとか成功しそうだ。
オレもボールと共に宙に浮く。
やがてオレとボールを中心とした強烈なハリケーンが吹き荒れる。
「これは……！」
「行くぞバルセロナオーブ！」
溜まっていたストレスとか色々込めてボールを強く蹴り出す！
「ホワイトハリケーン！」
蹴り出されたボールは白いハリケーンを纏いながらゴールへと伸びていく。
「行っけぇ！」
しかし、悲しいことにボールはライズアップ。軌道を変え、相手ゴールポスト上を通過する。
「……あれ？」
そしてボールが外に出たことにより試合終了のホイッスルが。
「邪念（ストレス）が入ったせいで集中力が途切れたか……？っていってぇ!?」

「おい大丈夫か、白撫！」
「こりゃ駄目だ！　風丸肩貸して！」
身体が出来る動きのキャパを超えたのか、オレの足は肉離れを起こした。
微妙な雰囲気で終わる試合。
しかし電光掲示板は無慈悲にも結果を出している。
『０対１１』
雷門は海外の強豪バルセロナオーブに大敗するのであった。

検査入院

バルセロナオーブとの試合の翌日。
試合終了後、肉離れだと判断したオレは学校休んで稲妻総合病院を訪れていた。
そして診断の結果、病室のベッドで横になっていた。
「はぁ……」
「なんで溜め息なんて吐いてるのよ？」
「いや、病院食を食わなきゃいけないと思うと憂鬱な気分になってな」
お見舞いに来た夏未嬢――雷門夏未にそう愚痴を零した。
健康なのに味が薄い料理を食わないといけないってのが気に食わん。
「あ、差し入れに醤油とかある？」
「あるわけないでしょ。それで症状は？」
手に持っていたフルーツバスケットを備え付けのタンスに置くと、椅子に座ってそう訊いてきた。
「予想通りの肉離れだった。ただその中でも軽症の部類には入るが念の為の検査入院だと」
「そう、それは良かったわね」
「ったく、最後の最後で格好がつかないぜ……」
結局、予想通り必殺技の難易度の高さに対して身体が追いついて来ないで肉離れを起こしたようだ。これが世界大会で使ってた技だったらと思うと背筋が凍る。
「てかなんで夏未嬢だけなんだよ？　鬼道は？　豪炎寺は？　風丸は!?」
「なんで円堂くんの名前が出てこないのかはなんとなく分かったわ……」
個人的に思う常識人上位3名の名前を出しただけだ。他意はない。
流石の円堂でも見舞いには来るだろう。
……来るよな？
「サッカー部の皆はパパに呼ばれてるのよ。だから私もこの後すぐに

戻らないと」
「ゑ？　なんか悪いことでもしたっけ？」
「全く……。パパに呼ばれてるって伝えた時の円堂くんと同じこと言ってるわ。流石は幼馴染ってところかしら？」
「マジか。まぁ確かに幼馴染だから否定はしないけどよ……」
幼馴染といえば冬花はやっぱり久遠監督のところにいるのだろうか。
しかし今は確かめようがないな。
「それじゃあ私は戻るわ」
「ん。お見舞いサンキューな」
「マネージャーだから当然よ」
「けっ、マネージャーじゃないと来てくれないのか」
「揚げ足は取らないでもらえるかしら。……まぁ、いつも相談聞いてもらってるし、このくらいは当然よ」
「ん？　あぁそういえばそうか。相談乗ってやってるんだから、さっさとくっ付いてくれよ」
「う、うるさいわねバカ！」
夏未嬢は捨て台詞を吐くようにしてドアを思いっきり閉めた。
……いや、あれは捨て台詞か

○○

夏未がお見舞いに来てから数時間後。
トントン。ドアをノックする音がした。
「ん？　どうぞー」
円堂たちか？理事長の話とやらは終わったのだろうか？
そう思いながら来客に対しそう声をかけた。
「げっ」
しかし現れたのは意外な奴だった。
「……」
昨日の対戦相手、バルセロナオーブの１０番だ。

「ケガの具合はどうだ？」
「も、問題はないです……。１、２週間もあれば完治するかと……」
「そうか」
いや、なんで敬語なんだよオレ！
ここは臆せず攻めろよ！
「ンっん！　てかあんたはどうしてここに？　今頃は観光してるもんだと思ってたんだが」
気を取り直すために態とらしく咳払いしてそう訊いてみる。
確かバルセロナオーブの滞在期間は今日までのハズ。
「他の選手たちはそうだ。だが私は君に用があってここに来ている」
「オレに用？」
奴はこちらを真っ直ぐに捉え、口を開いた。
「単刀直入に言おう。白撫亜嵐、私たちのチームに加入する気はあるか？」

スカウトと強化委員

「よっ亜嵐」
「ん、円堂か」
「鬼道たちもいるぜ」
　円堂が言うように後ろには鬼道と豪炎寺がいた。
「全員で来るのは病院側に悪いと思ってな」
「いや、その判断は間違ってないよ豪炎寺」
「まぁ座れよ」とオレは3人に促し、椅子に座らせた。
「……」
「どうした鬼道？」
「いや、なんでもない」
　オレのことをジッと見てたかと思ったが思い違いか？　まぁいっか。
「それで、理事長に呼ばれたって聞いたけど？」
「それの事だが……」
　何やら神妙な面持ちだ。珍しく円堂も難しい顔をしている。
「まぁだいたい予想はつく。昨日のバルセロナオーブとの試合のことだろ」
「そうだ。オレたちの……いや、今の日本のサッカーでは世界のサッカーには太刀打ちできないと世に知らしめた」
「世界との差が広がりすぎているんだ」
　鬼道と豪炎寺が順にそう言ってくる。
　それはそうだろう。本来ならエイリア学園との戦いを経て世界との戦いだ。その間に経験したものが全てすっぽり無いのだ。このままではエイリア学園のジェミニストームにすら勝てない状況だ。
「世界のサッカーとの差を縮めるためにも日本のサッカーを強くしなければならない……と少年サッカー協会の人に言われてな」
「ふむ。つまりはオレたちに協力しろと？」
「流石は白撫だ。理解が早いな」

「いや、けどどういった形で協力するんだ？　そこまではわからん」
オレがそう言うと、鬼道がバッグの中から封筒を取り出した。
それをそのままオレに渡してくる。
開けていいのかという視線を送ると、鬼道は無言で頷く。
「……なんじゃこりゃ」
封筒を開封するとそこには書類が入っており、その書類には学校名であろうものがリスト化されていた。
「……おい、まさか」
「あぁそのまさかだ。オレたちが日本のサッカーを強くするためにサッカー強化委員として各学校に転入し、日本のサッカーのレベルを押し上げてほしいと言われた」
「なるほど」
豪炎寺の説明に耳を傾きつつ、リスト化された学校をチェックしていく。
白恋、陽花戸、大海原といった知っている学校もあれば、永世、星章と言った全く知らない学校もあった。
一通り見たあと、気になったことを円堂に訊いた。
「雷門はどうなる？」
「一旦解散だってさ」
「そうか……。それで、どうするかは決まったのか？」
聞くまでもなさそうだが、一応。
「勿論やるさ！　日本のサッカーを強くして、今度こそバルセロナオーブに、いや世界に勝つんだ！」
「だよな、そう言うと思った。てか円堂、ここ病院」
「あっ、ごめんごめん」
声量が大きくなったことに対し注意する。
オレも一瞬病室だってこと忘れてたけど……。
「んで、行く所は決まったのか？」
「オレは木戸川清修に行こうと思う」
「古巣に戻るのか。ということは鬼道も？」
「いや、オレは考え中だ」

「あれ、そうなの？　まぁでも態々戻る必要もないのか帝国は」
　元々あそこは日本ではＴＯＰ１０に入るくらいの強豪校だ。世宇子中とかち合ったせいで全国初戦敗退なんかしたが、それさえなければ準々決勝まで残っているだろう。
「これ、期限は？」
「１週間だ」
「そっか。じゃあ早めに決めないとな。とりあえず面会時間終了も近いし、今日はお開きにしないか？」
「そうだな。じゃあ帰るか」
「お前たちは先に行ってくれ。少し白撫と話がある」
「そうか、分かった。じゃあ先に行こうぜ豪炎寺」
「ああ」
　そう言って２人は病室を後にした。残った鬼道をチラリと見て、溜め息を吐く。
「もしかして様子がおかしい？」
「まあな。何かあったのか？」
　そう聞かれ、オレは思わず枕の下に隠したメモを触った。
「お前たちが来る前にバルセロナオーブの１０番、クラリオ・オーヴァンが来てな」
「クラリオ・オーヴァンが？」
「ああ。それで話をして、ちょっと珍しく考えてるんだ」
「そうか。……これ以上は聞かないでおいた方が良さそうだな」
　そう言うと鬼道は荷物を纏め、立ち上がる。
「オレはお前の選択を尊重する」
「そうか、助かるよ」
「どちらに転んでも日本のサッカーへのプラスにはなるからな。じゃあな白撫、学校で会おう」
「おう」
　ほどなくして、鬼道も病室をあとにした。
　オレ以外いなくなった病室で、改めて枕の下に隠したメモを触り、今度はそれを取り出す。

そのメモには『クラリオ・オーヴァン』と名前が、そしてその名前の下には電話番号が綴られていた。

『オレが？　バルセロナオーブに？』
『そうだ』
『つまりスカウトってことか。しかしまたどうして……』
『昨日の試合を通し、君に世界のレベルを体験してほしいと思った。それに、良い選手をチームに引き入れたいと思うのは当然だろう』
『確かにそうだが……』
『すぐに、とは言わない。もし決断したならばこの番号に連絡してくれ。私のケータイに繋がる』

そう言われ、渡されたのがこのメモだ。
そのメモとサッカー強化委員の学校リストを交互に見比べる。
「あーもう！」
バンッ！　と音を立てながらメモとリストをタンスの上に置く。
「どうしたもんか、知るもんか！　とりあえず寝る！」
今日はちょっと予想もできないイベントが盛り沢山すぎた。そのせいで頭がパンク寸前だ。
だからオレの頭がパンクする前に、やけくそ気味に寝に入った。

脅威の侵略者さん!?

少年サッカー教会からの協力要請を受けてから4日が経過した。
既に雷門サッカー部の半分以上は雷門中には居らず、強化委員として転校している。曰く、1日でも早くチームを強くしたいだとか。
例外として、一之瀬と土門はアメリカに戻り、夏未嬢は各国のサッカーレベルを調査するために海外へと発った。
「染岡は白恋中か。これも奇妙な運命か？　それにしても吹雪士郎と吹雪アツヤねぇ……」
染岡が見してくれた白恋中の選手リストを思い出す。そこには過去に死んだはずの吹雪アツヤ。
確か吹雪から双子って聞いていたが、このリストを見ると吹雪士郎は2年で吹雪アツヤは1年だ。
（エイリア学園の襲撃が無い代わりにバルセロナオーブとの試合、そして吹雪アツヤの生存。どうやらただ過去に戻ってきたわけではなさそうだな……）
あまり詳しくはないが、バタフライエフェクトというやつだろうか？　それとも世界線？　とやらが違うのか……。
（ということは他にも色々と変わっていることがあるのかもしれないな。冬花の両親が生きてたり、ヒロトさんが生きてたり……）
そうと決まれば帰って親に聞かないと！
「おい白撫、どうするか決めたのか？」
「げっ鬼道。人が現実逃避しようとしている所に来やがって……」
「そうか、なら話しかけて正解だな。どうするんだ、あと3日しかないぞ」
「わかってるよ」
「決まってないのは円堂とお前だけだ」
「マジ!?　鬼道もう決めたの!?」
「ああ」
そう言って転入先が書いてある書類を見せてきた。
そこには『星章学園』と書かれていた。

「帝国じゃなくていいのか？」
「ああ。俺が戻れば以前と同じ帝国になると思ってな。それなら佐久間のもとで新しい帝国を作ってほしいと考えてる」
「それ佐久間には？」
「もちろん言ってあるさ」
「ふーん。ま、帝国は元から強いからな。もしかしたら鬼道が居た頃より強くなっちゃうんじゃね？」
ニヤリと笑いながらそう言うと、鬼道も含みのある笑顔で返してきた。
「それなら戦うのが楽しみだな」
鬼道のこういう所を見ると、円堂に負け劣らずのサッカーバカだなと再確認される。
「あと3日だ。お前も早く決めるんだな」
「おいおいあと3日もだろ？」
「危機感持ってというだけだ。俺はこれを提出してくる」
「ん、じゃあな鬼道」
「ああ、またな」
そうして鬼道は教室を去っていった。
そんじゃあオレも帰りますかね。
しかし、鬼道には「あと3日もある」なんて言ってしまったが、本当に3日で決められるのか？
個人的には海外のサッカーを体験してみたいという気持ちは勿論ある。だが日本のサッカーレベルを押し上げなければいけないというのも使命感としてあるのは確かだ。
「んーどうしたもんか」
靴に履き替え外に出る。
梅雨が明けたせいか、太陽がより眩しく感じる。
「とりあえずボール蹴りてぇなぁ……」
しかし問題を後回しにしているようで嫌だな。
「……ーい……」
んー……。

でも最近ボールに触ってないしな。
「おーい……」
いっその事行き先を運に任せるという手も……。
「おい、亜嵐！」
「うぉビックリした！」
いつの間にか緑髪の少年がオレの前に立っていた。それほど考え込んでいたのだろう。
って、緑髪？
「よっ、久しぶり。会うのは中学に入る前くらいか？」
そこには特徴的な緑髪を後ろで結んでいる少年。
「えーと……」
「えっもしかして俺の事忘れてた!?」
「いやそうじゃなくてだな」
時期が時期だからどう呼んだら良いかわかんないんだよ！
でもとりあえず本名呼ぶのが正解か？
「えっと久しぶりだな、緑川」
「ああ久しぶり！　旧交を温めに来たぞ」

○○

緑川を連れて鉄塔まで来た。
ベンチに座り、思い出話に花を咲かせて分かったことは3つ。
まず1つ目、どうやらエイリア学園はエの字すら無いらしい。
それをそれとなく聞いてみたら、「何言ってんだよ亜嵐。テレビの見すぎじゃないか？」と言われた。
あ、そっかァ……。
2つ目。ヒロトさん――吉良ヒロトは生きているということ。
どうやらこの世界？　では瞳子さんの弟ということになっているらしい。
そして理由は分からないが不良少年になってしまったらしい。
ええ……。

ただそのせいか、オレがいた世界のヒロトはここではタツヤになっているようだ。ややこしいな、おい。
そして3つ目。
「それで、オレに永世学園に強化委員として来てほしいと」
「ああ頼むよ。そりゃサッカーは皆できるけどさ、サッカー部は出来たばかりだから」
これだ。
強化委員として永世学園に来て欲しいとのことだ。
あっ、前言撤回。
「え」と「い」はありました。（小声）
「それ、他の人も言ってるのか？」
「うん。また亜嵐とサッカーしたいな、とは言ってる」
「……お前、直談判に来てること皆に内緒で来てるだろ」
「い、いやーなんのことやら」
コイツ……（呆れ）
ぶっちゃけ、お日さま園の奴らは日本トップレベルの腕前を持つのがチラホラいる。だからオレが行くと過剰戦力になりそうな気がするんだけど（建前）
「亜嵐は俺たちとサッカーやりたくないのか……？」
「やりたい（本音）」
あっ、そうだ（唐突）
ここでオレとお日さま園の繋がりについて簡潔に説明しよう。
オレの親父がお日さま園のパトロンであり、そのせいか親父が吉良星二郎さんと会う用事が頻繁にあった。オレはそれに連れて行かれ、お日さま園の奴らとよく遊んでいたというわけだ。
前の世界？　では途中でエイリア学園の件もあってパトロン辞めたりまたしたりと色々あった。とりあえずその時はオレがひどい目にあいました（憤怒）
でもこの世界だとパトロンは続けてそうだな。
「ただ、少し迷ってるな」
「迷うって何にさ？」

「今、選択肢が2つ出来たんだ。1つは強化委員としての挑戦。もう1つは俺自身の挑戦。どっちを選ぶか珍しく迷っててな」
「二者択一の状況ってことか」
「まぁそうだな」
　それ、諺じゃなくて四字熟語だけど。
「個人的には永世学園に来てほしいけど、それじゃあ無理は言えないな」
「悪いね」
「いやいいんだ。久しぶりに話せて良かった」
「そろそろ帰るよ」と言って緑川は立ち上がる。
「ただ1つ言える確かなことは、永世学園は亜嵐が来ることを歓迎するよ」
「そうか。てかそうじゃなきゃ行きたくないわ」
「はは……、まぁそうだよな。じゃあな亜嵐、またサッカーしようぜ！」
「ああ、またな。オレと会ったことバレるなよ」
「？　わかった」
　緑川はオレが言った言葉の意味をイマイチ理解しないまま、帰っていった。
　前の世界がそうなら、多分この世界でもバレたら厄介な奴がいるだろうからな。（確信）
「それにしても、どうしたもんかな」
「どうかしたのか？」
「うぉ!?」
　独り言を呟いたと思ったら、いつの間にか円堂が後ろにいた。
「え、円堂、いつからそこに……？」
「今来たばっかりだ」
　ジャージ姿の円堂は鞄をベンチに置きつつ答えた。
　緑川とはすれ違いか。
「そうか、タイヤやりに来たのか」
「これだけはしようと思って」

円堂は木にぶら下がっているタイヤを思いっきり投げ、振り子の要領で戻ってきたタイヤを受け止める。
「最初の頃と比べると、随分と楽に受け止めれるようになったな」
「そうだな。やっぱり特訓あるのみ、だな！」
ニカッと円堂らしい笑顔をこちらに向ける。
……円堂にちょっと相談してみるか。
「なぁ円堂」
「なんだ？」
「自身の力試しをするための挑戦と新しい仲間たちと一緒に強くなる挑戦、お前は2つのうちどちらかしか選べなかったらどっちを選ぶ？」
「それって片方は強化委員のことか？」
「まぁそうだな」
「もう片方はわかんないけど、うーんそうだな……」
円堂は特訓をやめると顎に手を当てて考え込む。
こういう時の円堂は頼りになる。（雷門サッカー部調べ）
「なあ、質問なんだけど」
「ん？」
「それってどっちも選んじゃいけないのか？」
「おい待てい（江戸っ子）お前ちゃんと人の話を……」
待てよ？　2つ選んじゃいけない……？
「なるほど、そういうことか！」
それは全くの盲点だった！
「ん？」
「ありがとう円堂！　お前のおかげで解決しそうだ！」
「お、おう」
こうしちゃいられないと荷物を早々に纏め、自宅へと向かって走り出す。
円堂のアドバイス通りにいけば、オレにとっても日本のサッカーにとっても一石二鳥のはず。

「今年中は短期留学して、年が越したら永世学園に強化委員として転入する……！」

そのために色々な所に確認を取らなくちゃな！

昔馴染みとの再会　前編

スペインの空港。
「クラリオ、ベルガモ、とりあえず半年間ありがとう」
「ああ、こちらこそ」
「まぁ案外悪くなかったね」
クラリオと握手を交わし、その隣立っている褐色肌でピンクの髪色の男、ベルガモ・レグルトとも握手を交わす。
あの決断から半年が過ぎ、日本へ戻る時期になった。
クラリオや少年サッカー協会に確認はとった時は最初こそ驚いていたが、双方とも快く承諾してくれた。
日本サッカーのレベルアップに繋がると考えたんだろう。
最初こそバルセロナオーブの練習についていくのがやっとだったが、これでもエイリア学園との戦いや世界大会を優勝したチームメンバーの1人だ。記憶と経験を駆使し、なんとか身体を世界大会本戦の時と同じくらいの状態に出来た。その頃にはバルセロナオーブのチームメンバー全員に認められていたし、スタメンにもなっていた。
間違いなく此処に来て正解だった。
「……彼女が来てないようだが？」
「昨日のうちにお別れは済ませたよ」
少し恥ずかしそうに笑うと、クラリオは「そうか」とだけ言った。
そのクラリオが言う彼女は、オレと再会した時にとても驚いて泣きながら抱きついてきた。
オレも彼女とはまさかこんな所で再会できるとは思ってなく、夢なんじゃないかと思っていた。というか、そのあとも驚きが待っていたのは記憶に強く残っている。
「アラン、戻るなら優勝してきなよ」
「当たり前だろ。サッカー上手い昔馴染みが多いし、なんてたってオレがいるからな！」
冗談で言ったつもりだが、何故か2人からツッコミが返ってこな

い。
「まぁ確かに否定はできないかもね」
「ああ。君は間違いなく世界トッププレイヤーの1人だ」
「ヤメロォ！　冗談で言ったつもりなのに急に褒めだすな、恥ずかしいだるォ！　？」
　あっ、もう飛行機の時間だー（棒読み）
「もういかなきゃー」
　わざとらしくそう言って、乗る予定の飛行機に向かう。
「あ、そうだ。アランに聞きたかったことがあるんだよね」
　ベルガモがオレの背中に向かってそう言ってきたので、立ち止まって2人の方を見る。
「聞きたかったこと？」
「うん」
　クラリオは無言のままこちらを見ている。
「フットボールフロンティア・インターナショナル……まぁ世界大会が来年にあるのは知ってるよね？」
「おい、お前オレのことバカにしてるのか？　スペイン代表を決める大会をついこの間やったばかりだろ」
　12月上旬に決勝が行われ、バルセロナオーブが優勝した。
「一応確認だよ、確認」
　ベルガモは両手を頭の後ろで組む。
「アランってさ、うちのチーム（バルセロナオーブ）と日本代表、どっちの選手になるの？」
　そういえばそっか……。全然考えてなかった。
「スペイン大会で登録されていたメンバーしか世界大会には出場できない。だからアラン、君はバルセロナオーブの選手としてでも出場できる」
「でも君は日本国籍があるし、日本の大会に出るのなら代表候補にだって選ばれる」
「可能性がある、だろ？」
「いや君は選ばれるよ。じゃなきゃ代表監督は見る目がなさすぎる」
「……」

さり気なく未来の日本代表監督に毒を吐くベルガモ。
確かに言っているとおり、今回の世界大会は2つの選択肢がある。
「僕からしたらどっちでもいいんだけどさ、一応聞いておこうと思って」
しかし。
「私はまた君と一緒に戦うのも、また敵として戦うのも、どちらも楽しみだ」
「その事なんだけどさ……」
人差し指で頬を軽く掻きつつ、言葉を続ける。
「実は全然考えてなかったんだ」
「ハァ、まぁ君ならそう言「もう決まっていたというか、自然とそのつもりでいたというか」う……？」
オレの返答が予想外だったのか、ベルガモは口を開いたまま閉じない。クラリオも驚きで目を見開いていた。
「今回の世界大会、オレは――」

○○

あの後、無事飛行機に乗り、日本へ。
「さむっ」
流石、冬の日本。
年々寒くなってる気がする。
「もう明日は大晦日か」
実家に帰りたいところではあるが、なんと夫婦水入らずの年末旅行をしてるとかで実家には誰もいないのである。ちっ（舌打ち）
お隣さんの円堂も他の中学校に行ってるせいか、円堂宅にお世話になるのもなんか気まずい。
なのでオレは永世学園、というかお日さま園へ直行なのである。
（迎えが来るって言ってたけど、待ち合わせ場所聞いてねぇんだけど母ちゃん……）
年末旅行中の母曰く、「迎えがいるから楽しみに待ってろ」とのこ

と。
　誰が迎えに来るかはサプライズ、らしい。きっとお日さま園の誰かだとは思うケド……。
「待ち合わせ場所がわかんなきゃ迎えの人にも迷惑だろうに。あ、オレもかけ直せば良かったのか」
　母もうっかりだが、オレもうっかりだった……。
「はぁ……どうしよう」
　容姿は前の世界でも見てるし、劇的な変化でもしてなければオレからしたらすぐに分かる。
　ただ、あっち側は……
「あ、やっと見つけた」
　聞き覚えのある声にオレは振り返る。
「ヒロト？」
「まさかヒロトと間違えられるとはね」
　そこには赤い髪の、基山タツヤがいた。
（そうか、この世界だとオレの知ってるヒロトはタツヤなのか……）
「ごめんごめん、久しぶりすぎてごちゃごちゃになっちゃって」
「確かに会うのは久しぶりだね。そうだ、瞳子さん亜嵐を見つけました、と」
「瞳子さんも来てるのか？」
　タツヤはスマホを取り出し、瞳子さんへ連絡をする。
「一応俺たちの保護者だし、監督でもあるからね。静岡の方までは新幹線だけど、そこからは瞳子さんが車を運転してくれるんだ」
「なるほど」
　5分くらい待つと瞳子さんもオレたちがいる所にやってきた。
「久しぶりね亜嵐くん」
「ご無沙汰してます、瞳子さん」
「ちなみに待ち合わせ場所に来なかったのは？」
「母のうっかりです……」
「はぁ……。亜嵐くんのお母様は相変わらずね」
　呆れたように溜め息を吐くが、口の端は上がっている。

そういえばお日さま園の人なら母のうっかり癖は知ってるか。
「とにかく積もる話もあると思うけど、新幹線の時間だから続きはそこでしましょう」
「分かりました」
そう言った瞳子さんの背中を追いかけ、新幹線へと向かう。
あっ、そうだ（唐突）
「2人とも！」
そう声をかけると、2人は立ち止まりこちらに振り返る。
「とりあえず、後でも言うと思うけど」
1度お辞儀してから顔を上げる。
「これからよろしく！」

昔馴染みとの再会　後編

「着いたわよ」
　瞳子さんが車を駐車場に入れ、エンジンを切る。
「ん～」
　車から外に出て、身体を伸ばす。
「久しぶりのお日さま園だなぁ」
　オレが小さい時と外観は全く変わっていない。
　懐かしいなんて思っていると、急にお腹が鳴り始めた。
　後ろを見れば、タツヤと瞳子さんは呆れて笑っている。
「そういえば朝食とってから何も食べてないな」
「それなら丁度いいわ。お腹いっぱいって言われても困るもの」
「???」
　なんのことかサッパリなオレは首を傾げる。
「サッカー部のみんながあなたの歓迎会をしたいって言ってきたのよ」
「久しぶりに会うし、報告とかそういうのも兼ねてね」
「おまえらぁ……！（号泣）」
　感動で前が見えない。涙が止まらない。
「寒いけど少し待っててもらえるかしら？　準備が出来たか確認してくるから」
「サーイエッサー！」
「う、うん……」
　そう言うなり瞳子さんは先にお日さま園の中へ
　なんかヒロトの反応がイマイチなんだが……。
「アラン」
「ん？」
　タツヤが手招きしている。聞かれたらまずい内容なのだろうか？
　仕方なくタツヤに耳を近づける。
「もし……。もしなんだけど……」

「タツヤ、アランくん、準備が出来たみたいよ」
お日さま園の中から瞳子さんが顔を出す。確認が取れたようだ。
「あ、分かりました！　それでタツヤ、もしなんだ？」
「いや、やっぱり大丈夫だ。作ってないことを祈ろう」
「は？」
タツヤはそう言うなり、お日さま園の中へ入って行く。
とりあえずオレもそれに続いて中に入るが、一体なにを伝えたかったんだろうか？

○○

パァン！
広間の扉を開けた瞬間、クラッカーのけたたましい音がオレの耳をつんざく。
「「ようこそ永世学園へ」」
お日さま園のみんなが声を揃える。
「おぉ！」
懐かしい顔ぶれがいっぱいだ。
「よ、　久しぶりだな！」
「来るのを楽しみにしてたよ」
「晴矢に風介！」
真っ先に話しかけて来たのは南雲晴矢に涼野風介。
わぁーバーンとガゼルだ！（小並感）
そういえばタツヤもそうだったがこっちの世界の風介は血色が良い健康的な肌だな。
「2人共、話したいのはわかるけど先に乾杯しちゃおうよ」
「そうだな、悪い悪い」
「久しぶりアラン！　はいコップ」
「久しぶり、杏」
オレの分を持ってきた蓮沼杏からジュースの入ったコップを受け

取る。
「よしタツヤ、せっかくだしお前が音頭を取れよ」
「言われなくてもそうするつもりだったよ」
　晴矢の言葉で視線がタツヤに集まる。
「さてと、まずはアラン。永世学園に来てくれてありがとう。またお前とサッカーが一緒にできて嬉しいよ」
　オレもそう思ってるけど、急にやめろよ（照れ）
　でもみんなも同じ事を思っていてくれているのか、タツヤの言葉に笑顔で賛同してくれている。
「来年には……いや、あんまり長いと悪いし、ここでやめとこうか」
　挨拶を程よく切り上げたタツヤはそのまま「乾杯！」と言う。
「「かんぱーい！」」
　それを合図にみんなも「乾杯」と口にし、コップを近くの人たちとぶつけ合う。
　さて、オレは早速飯でも……
「久しぶりだなアラン！」
　ファ!?
「って、砂木沼か。久しぶり、しかしびっくりした……」
　永世学園サッカー部でオレを除けば唯一の2年生である砂木沼治。だから来年からはオレと砂木沼だけ3年生になる。
　でもぶっちゃけこの学校、先輩後輩の関係というより家族としての関係の方が強い気がするからあんまり学年って関係ないかもしれんけど。
　そういえば忘れてた。前の世界では同い年だったが、なんとタツヤたち2年生はオレの1歳下になっている。でもさっきの通りあんまり関係ないからそんなに気にしてはないんだけども。
「びっくりさせてすまない。しかし俺は一刻も早くお前とやりたいことがあるのだ……！」
「やりたいこと……？」
　なんだなんだ、やりたいこと？（動揺）

「俺と一緒にフットボールフロンティア決勝大会ごっこをしてくれ！」

……

ア　ホ　く　さ

そんなことのためにオレの食事を邪魔するの？

辞めたらこの部活ゥ？（辛辣）

んんッ！　おっとイケナイイケナイ。つい心の闇が出てきてしまった。

「実際に出場したお前とならレベルの高い入場アイタッ!?」

後ろからハリセンによる強烈なツッコミ。オレじゃなきゃ見逃しちゃうね。

「アランが困ってるでしょ」

「む、そうだったか。それは済まなかった」

「それよりタツヤが手伝ってほしいって」

「タツヤが……？　わかった。アラン、また後でゆっくり話そう」

「お、そうだな（適当）」

砂木沼への返答は適当に済ませると、次は砂木沼にツッコミを入れ者へと視線を移す。

「ぶっちゃけ助かったわ、クララ」

「ん」

ツッコミを入れてくれたのは倉掛クララ。彼女は適当にハリセンをほおり投げると、もう片方の手で持っていた物をこちらに差し出してきた。

「お腹空い「アラーン、お腹空いてるんでしょ？　色々持ってきたよー！」……杏」

「ふふん」

クララが視線を向ければ、杏は不敵な笑みを返す。

なんか2人の間でバチバチしたモノが見えるが気のせいだろう。

「よ、アラン。食べ物持ってきたぜ」

「サンキュー緑川」

とりあえず緑川が持ってきたお皿を受け取り、盛り付けられていた唐揚げを食す。
うん、おいしい！
「それにしてもまさか海外に行くとは思ってなかったよ」
「でも半年前のあの時、お前が来てくれなかったら多分オレはスペインにいたままだったかもな」
「それなら内緒で行った甲斐があったもんだ」
緑川と半年前のことを話していると、不意に後ろから怒気を感じた。
あっ……（察し）
「ごめん緑川、逃げてくれ」
「え？」
緑川が困惑する中、後ろにあった怒気は緑川の後ろに移動していた。
「リュウジどういうこと……？」
「返答次第では……」
そう、怒気の正体とは杏とクララのことである。
「いーっ!?　お前が半年前に言ってたのってこの事かよォー!?」
緑川はすぐさまその場から逃げ出した！
「待てこらガキ！」
もちろん、杏とクララは緑川を追いかける。クララはほおり投げていたハリセンを再び持ってだ。
良かった、オレじゃなくて（小声）
騒がしいのがどこかに行くと、今度は妙に疲れているタツヤがこちらに来た。
「なんか疲れてそうだけど、どうかしたか？」
「ごめん。俺からはそうとしか言えない」
そう言って肩を叩くなり、タツヤは逃げるように壁側へと移動する。
「？」
意味がわからない。どういうことなんだ？

「そういえばタツヤを手伝いに言った砂木沼は……？」
しばらく辺りを見渡すとキッチン近くの床に伏している砂木沼を見つけた。
何してんだあいつ……？（困惑）
とりあえず近寄り、身体を揺することにした。
「おーい、どうした？」
「は、離れろ……アラン……」
「離れろ？」
気を失ったのか砂木沼はそれ以上喋ることは無かった。
せっかく心配してやってんのに離れろって……。
「アラン」
「ん？　玲名じゃん久しぶり」
「ええそうね」
今度は両手にお皿を持った八神玲名とエンカウントした。
「それ料理？」
「ええ。せっかくだから私も何か作ろうと思って」
「へぇ～。玲名って料理できたんだ」
「もちろんよ。でもみんなは中々料理させてくれなくて」
「……ん？」
なんか雲行きが怪しいぞ？
というか気がついたら周りにはオレと玲名しかいない。（砂木沼は気絶しているのでノーカン）
「食べてみる？」
そう言って玲名は料理を差し出してきた。
料理は普通の揚げ物だが、さっきの会話から察するに……
まぁいっか（即決）
「いただきまーす」
揚げ物を1つ掴み口の中へ。
遠くから「あいつマジか!?」という晴矢の声が聞こえた気がするが気のせいだろう。
ちゃんと噛んで味わいながら呑み込んでいく。

なんか揚げ物なのに変にネチャネチャしているが……
「普通に美味しいね（味音痴）」
「ホント？　良かったわ」

「「えぇ!?」」

○○

夜も更け、少しボールに触りたくなったオレはタツヤを誘い、近くのサッカーコートに来ていた。
近くのサッカーコートと言っても、吉良家の敷地内ではあるが。
「それにしてもすごいな」
「なにが？」
「玲名の料理を完食しただろ？」
「あれくらい普通だろ？」
「普通……？」
軽いパスをしながら、さっきのことを思い出す。
あの後、みんな他の料理を食べ過ぎたのか、食べる人がいなかったので、残すのも玲名に悪いし全部オレが食べた。玲名はお代わりを作ろうとしていたが、流石にオレもお腹がいっぱいになったし丁重にお断りしておいた。そして腹ごなしのためにタツヤを誘い、サッカーをしているわけだ。
「それにしても本当に楽しみだ」
「一緒にサッカーができることが？」
「それも勿論あるさ。だけど、それよりもあの頃の約束が果たせるかもしれないと思うと、早くフットボールフロンティアに出場したいよ」
「や、約束？」
しまった！　この白撫亜嵐が恐れていたことの1つ、こっちの世界に来る前の約束事である！　この世界の白撫亜嵐が記憶なんてこれっぽっちも残ってないのだ。……多分。もしかしたら残ってる可

能性もあるかもしれないが、現に今、タツヤの言う約束とやら思い出せていない。
「そ、それっていつ頃の――」
墓穴を掘らないように聞こうとした所で別の人声に遮られた。
「よォ。久しぶりだなアラン」
前の世界では1度も聞いたことがない声。しかし、どこか懐かしさも感じる声。
オレは声のした方向へ振り返る。
そこには如何にもな不良少年が立っていた。
「ヒロト、何しに来たんだ」
「えっヒロト!?」
まさかこの不良少年がヒロトだったなんて。しかもタツヤがヒロトって呼ぶのにも違和感を覚えてしまう。
「おいおい、俺のこと忘れちまったのかよ」
「いやいや、そんな不良になってるとは思ってなくてだな……」
「チッ、まぁそんなことはどうだっていい」
聞きましたか!? 今あの子舌打ちしましたよ!?
「お前、海外のチームにいたんだってな」
「まぁそうだけど」
そう返答するとヒロトはこちらに歩み寄り、顔をグイッと出してきた。
その顔は不敵な笑みを浮かべている。
「じゃあおい、俺と――
今ここでサッカーしろよ」

サッカーバトルだ！　タッチペンを抜け！

ヒロトが言う「サッカーしろよ」はサッカーバトルのことだろう。
「おいヒロト、アランは今日来た「あ、イイっすよ（快諾）」……いいのか？」
「いいよいいよ。どうせタツヤとやろうと思ってたし。それがヒロトになるだけだ」
「けど……」
「それに、今の日本のプレイヤーがどれくらいかってのを見てみたかったしな。ヒロトなら適役でしょ」
「上から目線なのが癪に障るがよく分かってんじゃねぇか」
「うん、まぁ個人の技術力なら間違いなく日本トップレベルでしょ」
ヒロトのサッカー技術に関してはタツヤと瞳子さんから聞いてるから分かってたけど、この数分の会話で個人プレイに走る選手の典型的な奴っていうのは分かった。
「ほら」
唐突にヒロトの胸目掛け早めのパスを出してみたが、難なく胸でトラップしてボールを地面に落とす。
「お前、ＦＷなんだろ？　オレは守備型のボランチだし、オレを抜いてゴールしたらヒロトの勝ち。オレがボールを取ってゴールを決めたらオレの勝ちでどうだ？」
「それでいいぜ」
「タツヤ、ゴール前に立っててくれない？　ヘナチョコシュートで入っても面白くないし、なんなら軽くキーパーでもしてくれると有難いんだけど」
「……分かった。とりあえずボールが来たら可能な限り蹴り返すよ」
そう言ってヒロトはゴール前へ駆け足で向かう。
その間にオレとヒロトは距離を取り、いつでも始められるような状態になった。
「さてと、そちらのタイミングで始めていいよ」
「けっ、その余裕な態度、すぐに変えてやるぜ！」

そう言うと同時にヒロトはボールを前に蹴り出し、ドリブルを始めた。
それに対しオレは腰を落とす。
「ちっ」
ヒロトは苛立ちのあまり、舌打ちをする。
巧みなボール裁きで抜こうとするが、オレがそれに対応するため、抜くことが出来ない。それへの苛立ちだろう。
(やはり個人の技術力なら日本トップレベルか。これなら世界と戦える日も近いか。……しかし)
オレがわざと反応を送らせてみる。するとその好機をしっかりと見逃さなかったヒロトは、フェイントを織り交ぜつつ俺を抜き去った。
「けっ、世界のレベルってのも案外低いんじゃねぇか!?」
悠長に捨てセリフを吐きながらゴールへ向かってドリブルをするヒロト。
タツヤもオレが抜かされたことに驚いているようだが、シュートに反応すべく構えをとる。

しかし

「いやぁ、甘々だなヒロト」
「なっ!?」
ヒロトが驚くのも無理はない。
抜いたと思っていたオレが、また前にいるからだ。
「誰かが言ってぜ。勝ちを確信した時が一番油断するってな」
オレは抜かれた後、すぐさまバックステップを行ったから追いついた。
わざと抜かさるつもりで体勢を整えなきゃ流石のオレでも追いつけない。
けど、効果は覿面(てきめん)のようだ。
これは必殺技じゃない初見殺し技として採用するのもアリだな。

「おっと」
とりあえずその話は置いておいて、先にボールを取っちまおう。
「ぐぁ!?」
その場でスライディングし、ヒロトからボールを奪取。その際、ヒロトはボールに躓き倒れた。
「いくぞタツヤ!」
すぐさま立ち上がり、シュート技を使う。
ペナルティエリア外で距離もそこそこあるけど、キーパータツヤだし入るだろ（適当）
「ディバインアロー!」
強力なシュートはそのままゴールへと一直線に進む。
そして案の定、タツヤは反応できずにボールはゴールネットに突き刺さった。

○○○

「ま、こんなところかな。オレの勝ちだなヒロト」
ニカッと笑いながらヒロトに爽やかに言ってみた。
変な言い方して遺恨が残るのも嫌だしね。
「ちっ……。今回は負けを認めてやる」
なんともまぁ定型文。
ヒロトはそう言うなりすぐさま立ち上がり、グラウンドを去ろうとする。
「ヒロト!」
「んだよ」
嫌々こちらを振り向くヒロトに、オレは腕時計をヒロトに向ける。
「あん?」
「良いお年を!」
気づいたら時刻は0時を超えており、大晦日になっていた。
多分今日はもうヒロトに会わない気がしたので今のうちに言っておこうと思ったのだ。

「……ふん、お前もな」
ヒロトはそう言って今度こそグラウンドから去っていった。
「なぁタツヤ」
「なんだい？」
「アイツ、根は良い奴だな」
まぁなんとなくそんな予感はしてたが。
「まぁそうだね。悪い奴ではないよ」
そんなオレの言葉にタツヤは少し笑った。

「てかさ、これ時間大丈夫か？」
「え？」
今のお日さま園に門限があるのか知らないけど一応ね。
タツヤに時刻を見せるために腕時計を差し出す。
時刻はちょうど０時３０分になっていた。
タツヤは時刻が分かったからか、冷や汗が頬を伝っていた。
「……まずい！　瞳子さんはヒロトが深夜徘徊するようになってから門限に厳しいんだ！瞳子さんに叱られる！」
「ちなみに門限は超えてるのか？　超えてるならもうゆっくり帰れば良くね？」
「超えた分だけ説教が長くなるし、罰も出る」
「はぁー!?」
すぐさまオレとタツヤはお日さま園に向かって走り出す。
「おま、門限のこと先に言えよ！」
「門限までに帰れると思ってたんだよ！」
何気に全力疾走なのにタツヤはそれについてくる。
実力なのか、それとも瞳子さんから怒られるのがそんなに嫌なのか……。
「アイツ、もしかしてこれが分かってて勝負をふっかけてきたのか!?
だとしたら嫌な奴だな、おい！」

してやったりという顔をしているヒロトが目に浮かぶ。
「さっきと言ってることが違うけど、今はそんなことより走るぞアラン！」
お日さま園に急いで戻ったオレたちだったが、悲しいかな。瞳子さんからのお叱りという名の雷は落ちたのだった。

「へっ、ざまぁねぇぜ」

前の世界の記憶とコネは使いよう

静かな部屋で軽快なタイピング音が鳴り響く。
「一応これで完成、っと」
わざとらしくＥｎｔｅｒキーを押し、パソコンの画面に映る文章をもう一度チェックする。
「終わったのか？」
「ああ。あとはこれを全国の学校にバラ撒けば終わり。次の大会は楽しくなるぞ」
「そうか、それはとても楽しみだ」
ルームメイトである砂木沼は闘志が昂っているのか、気持ちの悪い表情を浮かべている。
「悪いんだけど、このデータ瞳子さんに渡してきてくれない？　うちの学校はもう使ってるけど一応ね。オレはまだやらないといけないこともあるし」
「む、そうか。ならばこのデータは俺が渡してこよう」
データを転送したＵＳＢを砂木沼に渡し、パシリに使う。
「このＵＳＢは瞳子監督に必ずや砂木沼治が届けよう！」
「ハイハイ、分かったからさっさと行ってくんなまし」
手で早く行けというジェスチャーをし、砂木沼を部屋から追い出す。
あいつ四六時中テンション高いな（呆れ）
砂木沼が部屋から出たことを確認し、パソコンの中にある１つのファイルを開く。
「アイツらを巻き込むわけにもいかないしな……」
結局、エイリア学園が襲来するかしないかなんて関係なく、ドス黒いナニカの陰謀は動き出していたのだ。
「なんでオレたちってこう、陰謀に巻き込まれやすいんだが」
影山の件とかエイリア石の件とかガルシルドの件を思い出しながらそう呟く。
ファイルの中にはできる範囲で集めてみた証拠が入っていた。

「前の世界では聞いたこともない名前だったから、これ集めるのも一苦労したな」
と言っても、確証的なものは一つも無いが。
今回に関しては部外者ではあるが見過ごすわけにはいかない。ある意味、日本サッカーの危機だから。危機レベル的には影山とエイリア石の中間くらいだろうか？
なんて考えつつ、オレはファイルに入っているある人物のプロフィールデータを開いた。
「とりあえずは彼に協力を申し出るしかなさそうだな」
野坂悠馬という男に。

○○

瞳子さんから3日ほどのお暇と星二郎さんからあるお言葉をいただき、東京へ来ていた。
「さっさと集合場所のカフェに行きますか」
稲妻町の駅に降りたオレは軽く背伸びをしてから歩く。
今回、東京に来た目的は3つ。
とりあえず1つ目の目的である円堂たちに再会すべく、カフェへと足を運んでいる。
「白撫」
「ん？　って鬼道じゃん」
ふらふら歩いていると、集合場所であるカフェに向かっていたであろう鬼道と出会った。
「久しぶりだな」
「お、そうだな。なんか変わったか？」
見せつけるように様々なマッスルポーズをとっていく。
それを鬼道は口の端を引き攣らせながら見る。
「……お前は相変わらずだな」
「そうか？」
とりあえず鬼道と一緒に集合場所であるカフェへと向かう。

「聞きたいことは山ほどあるが、とりあえず新しく入った学校はどうだ？」
鬼道、お前はオレの父親か。
そしてその手の話題はだいたい面倒くさがれるぞ。
「まだ学校は長期休みだから転入はしてないんだけどね」
帰ってきたのは大晦日前日だし。
「そういえばそうだったな。ということはサッカー部もか？」
「いや、そっちは正式な入部はまだだけど練習には参加してるよ」
「そうか。ということは今日見せると言ってた練習メニューも？」
「ああ。実際に取り入れてやってる」
「効果はどうだ？」
「まだ試して1週間しか経ってないけど、良い感じだな」
そう、今回の1つ目の目的はオレが帰国してから夜な夜な作っていた練習メニューを鬼道たちにも見せ、そのまま日本サッカー協会に提出するということだ。
「お、着いた」
「どうやら円堂と豪炎寺はもう着いているみたいだな」
目的地であるカフェに到着。鬼道はケータイを確認したのだろう。
ケータイを仕舞うなりカフェの中へ入っていく。
「豪炎寺が遅れてない……だと……!?」
明日は雪か？

○○

「久しぶりだな」とお決まりの挨拶をしつつ、オレと鬼道も席にかける。
そしてドリンクを店員に頼んだところで、バッグから書類の入ったファイルを取り出す。
「さて、早速だけど1つ目の目的の練習メニュー。渡すぜ～」
4つの束になっている書類のうち、3つをそれぞれ円堂たちに渡す。残りの1つは少年サッカー協会に提出する用だ。

「少年サッカー協会から全国の中学に配布してもらうのは少し待ってもらおうと思ってる」
「どうしてだ？」
「有用性を示さなかったら意味ないだろ」
円堂の疑問に答え、運ばれてきたコーヒーに一口飲む。
にっがーい……。
オレは角砂糖を１０個ほど、コーヒーにドボドボ入れる。
「もはやコーヒーから砂糖水に変わってないか？」
「糖尿病になるぞ……」
それを見た豪炎寺と鬼道がドン引きしながらもそう言ってきた。
「シャラップ！　オレのコーヒーはどうだっていいんです！　話を戻しますよ」
オレは脱線した話を戻すべく、書類を叩く。
「だから円堂、豪炎寺、鬼道、そしてオレの４人が所属しているチームが先行でこの練習メニューを行い、有用性を示す。期限は１ヶ月だ」
「そして」とオレは言葉を続ける。
「これは２つ目の目的に含まれるんだけど……」
「そういえばオレたちに頼みたいことがあるって言ってたな。それか？」
「それ。率直に言っちまえば１ヶ月後に練習試合がしたくて、その相手を鬼道のチームにお願いしようかなって」
「なぜ俺、というより星章なんだ？」
「そりゃお前、スポンサー繋がりよ」
永世と星章のスポンサーは違うが、代表は吉良星二郎だ。
ぶっちゃけ相手はどこでも良かったんだが、せっかくならこのコネを使ってしまおうと。
「星二郎さんにお願いして融通は効くようにして貰ってるから、鬼道さんはお願いと言うより強制だね☆」
「色々と腑に落ちないが、まぁいいだろう」
鬼道さんは鼻で笑うとそう言ってくれた。
「それで俺たちに頼みたいことって結局なんなんだ？」

もう少しゆっくりしながら言おうと思ってたが、円堂が聞いてくれたのでそのまま言ってしまうか。
「まずは円堂！」
「おう！」
「お前は響木監督と一緒に陽花戸中に行ってくれ！」
「おう！　……おう？　陽花戸中ってどこだ？」
器用に顔を豪炎寺の方に向けるが「聞いたことがない」と言われ、次に鬼道の方に向ける。
「俺も聞いたことがない。どこにあるんだ？」
「福岡」
「なんで俺と響木監督がその福岡にある中学に行かないといけないんだ？」
まぁ当然の反応だろう。聞いたこともない学校に行けと言われれば。
「お前の爺さんの幼馴染が校長をしてる学校だ」
「なっ！　じいちゃんの!?」
「ああ。それに、そこにはお前の爺さんが残した裏ノートっていうのもあるんだ」
「裏ノート……」
「白撫、円堂が知らなかった情報をどうやって？」
「色々と偶然が重なったんだよ」
鬼道からの質問を軽くはぐらかす。
日本に帰ってきた時に、オレは陽花戸中に行って校長に会った。
その時に裏ノートのことについて聞くのは苦労した。オレが未来？　別世界？　から来たというオカルトな説明をする訳にもいかず、やんわりと「そんな話を聞いた」という曖昧な言い方をした。
その時の校長は怪訝そうな顔つきだったが、円堂の話をしたら納得してくれた。そうすると、裏ノートを渡すのは円堂本人にしたいという校長の条件の元、裏ノートの譲渡を認められたのだ。
まぁ元よりそのつもりだったからすぐに了承した。
日本を強くするのなら裏ノートの存在は必須だろう。少なくとも

キーパーである円堂が究極奥義を覚えてくれれば良い。
「それに、面白い奴もいるしな」
もしかしたら、円堂を陽花戸中に行かせる1番の目的はそれかもしれない。
そいつは円堂を超えることのできるキーパーセンスを持つ男。
「面白い奴？」
「会ってからのお楽しみだ」
きっと、そいつとの出会いは円堂にも良い刺激を与えてくれるだろう。
「最後に豪炎寺！」
「やっと俺か」
「世宇子中との戦いで使った技練習しよ？」
「は？（迫真）」
だってあの必殺技カッコよかったんだもん！

ＶＳ星章学園　前編

「今日も練習キツかったッスね～（独り言）」
なんて呟きながら向かうのは初日にも訪れたカフェだ。
東京旅行３日目、最終日。
無事、練習メニューも少年サッカー協会に提出し条件も伝えられたし、円堂は福岡の陽花戸中に行ってくれたし、鬼道に伝えた練習試合の件は星章の監督にも承諾して貰えたし……。そして何より、豪炎寺とのファイアトルネードＤＤの練習は最終日である今日までかかってしまったが、コツは掴めた。これならオレのやりたい必殺技も形になるはずだ。
……ただ、独り言でも呟いた通りめちゃくちゃキツかった。
どうやら豪炎寺も新しい必殺技のキッカケが欲しかったらしく、オレよりも熱があったような……。しかしそのおかげか、最後には新しい必殺技を作り出していた。見たことある必殺技だったからそこまで驚かなかったケド。でも一応驚いたフリはしておいた。
そんな疲労溜まりに溜まっている身体で初日訪れたカフェへ向かっている理由。
それは東京旅行最後の目的である野坂悠馬との接触である。
少年サッカー協会の人に「私、彼のこと気になります！（意味深）」といったニュアンスで会う機会をセッティングしてもらった。ちょっと引かれてたような気もするけど気にしないでおこう。
野坂君には断られるかとも思ったけど、どうやらあちらさんも乗り気なようで助かった。
カフェに到着し、店内を見渡す。
……どうやら先に来ていたようだ。奥の方にいるのを見つけた。
店員さんには「待ち合わせの人がいる」と言って野坂君の元へ向かう。
「やぁ、初めましてだね。野坂悠馬君」
後ろから声をかけると、こちらに振り返ってくれた。
両手に切られたスイカを持って。……何故スイカ？

「あなたが白撫亜嵐さんですね。初めまして」
「急な呼び出しに応じてくれて感謝してるよ」
「いえ、僕も貴方から話を伺いたいと思ってましたから」
席に座りながらそう言うと、野坂君はそう返してくれた。
……なんか死んだ魚のような眼をしてるなぁ（失礼）
なんて心の中で思いつつ、早速切り込んでいこうと思う。
「単刀直入で申し訳ないんだが……。今日呼び出した理由をお伝えしよう」
鞄から1つのＵＳＢを取り出し、それを野坂君の前に置く。
「アレスの天秤をぶっ壊すのに協力させて欲しい」
彼の死んでいる魚のような眼が、少しギラついた。

○○

…

……

……

なんて、1週間以上も前にあった野坂君との接触のことを思い出していたら、急に頬を抓られた。
「いててっ!?」
「いつまで呆けてんのよ！」
「な、何が？」
頬から手を離した杏がプンスカと怒った表情で、ある方向に指をさす。
自然とその方向を辿っていく。
『永世学園　０　ＶＳ　１　星章学園』
そこにはそう映し出されていたスタジアムの電光掲示板があった。
「そういや試合中だったな」
「試合中だったな、じゃないわよ！　もう後半も始まるのよ！」
「あれま」
「もう……本当に昔から変わってないわね、アラン」

「オレはオレだからな」
なんとなくカッコつけてそう言ってみたものの、状況が全く飲み込めていない。
でも杏に聞くとまた怒りそうだし、自力でなんとか把握するしか……。
「亜嵐くん、そろそろ出番よ」
「あ、はい」
把握する前に瞳子さんに呼ばれちゃった。
「アナタはこっちに来てから初めての練習試合だし、今のチームの状態を客観視してもらうためにベンチにいてもらったのだけど」
「バッチグーでっせ！（大嘘）」
ごめんなさい、何も見てませんでした……。
「そう、それなら後半からは亜嵐くんにも入ってもらいます」
そう言ってピッチに戻っていた1人の選手と交代させ、オレはピッチの中へ。罪悪感がすごい。
「やっと来たか」
「うっす」
既にピッチ内にいた鬼道に声をかけられる。
「今のチームの状態とオレたちをどう切り崩すか、客観的に見ていたのか？」
「そうだよ（便乗）」
適当に返事したけど、そこまで考えてないから深読みはやめようね！
「ふっ、楽しみにしてるぞ」
そう言うと鬼道は自分陣地に戻っていく。
それと入れ替わるように晴矢がジト目のままこちらに来る。
「お前、前半ボーッとしてただろ」
「バレテーラ」
誰も気づいてないと思ってたら晴矢には気づかれていた。
なんでだよ！　試合に集中しろよ！　オレのこと好きかよ！

ＶＳ星章学園　中編

「とうとう出てきましたね」
　そう言いながら鬼道に近寄るのは星章学園のＤＦ兼キャプテンの水神矢成龍である。
「ああ」
「ベンチで戦略でも練っていたんでしょうか？」
「いや、アイツは前半中は心ここに在らずという感じだった。それにもし違ったにせよ、そんなことは考えてもないだろうな」
　亜嵐とのやり取りを思い出したのか、思わず口の端が吊り上がる鬼道。
「水神矢、あえて皆には言ってなかったんだが……」
「なんですか？」
「アイツには１つ、特技があるんだ」

○○

　さて、気をとりなして試合に望むとしますか！
「ボールでも持って集中しやがれ」
　晴矢はそう言ってボールをこちらにパスしてきた。
　とっくに後半が始まるホイッスルはなっており、永世学園のキックオフからスタートしている。
「さーてと……」
　身体を上に伸ばし、身体の緊張を解す。
　本当ならいつもは試合中にこんなことはしないのだが、さっきまでボーッとしてた故、堪忍な！
　とりあえずＦＷの晴矢と風介はゴール前まで走りに行ってて、オレ以外のＭＦは中盤辺りにいるって感じね。
　適当に前へドリブルしつつ、コート内の状況把握をする。

案の定、指揮系統がしっかりとされている。流石は鬼道。
（それと……）
チラッと敵ベンチを見る。
さっきまでは気づかなかったが、星章学園の監督はなんと久遠監督だったのだ。これにはビックらポン。まさに鬼道久遠監督に金棒である。……鬼だけに。
……いや、鬼道久遠監督に金棒か？
「もらった！」
「ま、どうでもいいか」
敵のＭＦがスライディングでボールを奪いに来るが、難なくこれを回避。
悪くないけど、貧弱なスライディングだった。
（あの渡した練習メニュー、ちゃんとこなしてるみたいだけどまだ世界には通用しないかな）
ここでギアを入れ替え、ドリブルのスピードを速くする。
「は、はや!?」
「追いつかない！」
後ろからそんな声がするものの、１人分の気配が。
「あの練習メニューをこなしてはいるが、まだ日が浅いからな」
「ま、そうだろうと思ってたよ」
やはり、難なく付いてくるのはゴーグルマント男、鬼道有人だった。
「キラースライド」
「ファ!?　おめェ使えたのかよ!?」
「帝国学園の選手なら誰でも使えるぞ」
鬼道がスライディングしてきたかと思えば、帝国学園の選手がよく使うＤＦ技である『キラースライド』を使用してきた。
無数に見える蹴りの残像がオレに迫ってくる。
本職がＤＦである土門のよりも少し劣るが、間違いなくその次点の完成度ではある。
「だがしかし！　この俺からボールを取るならば、そんな技じゃダメだぜ！」

素早くボールを空中に蹴りだし、オレも回転を加えながらジャンプする。
「ま、まさか!?」
「ファイアトルネード！」
「木戸川清修の豪炎寺修也の必殺シュート!?」
「天野止めろ！」
星章のチームメイトがキーパーに声をかける。
「……！」
言われなくとも、と言いたげにモジャモジャのＫＰは必殺技を使うべく構えを取る。
「それはシュートじゃない、パスだ！」
オレの意図に気づいた鬼道であったが、悲しいかな。
「ナイスパスだ、アラン！」
もう遅い。
「ノーザンインパクト！」
炎を纏ったボールは氷に包み込まれ、シュートスピードは更に増す。
ちなみにだが、永世学園にはシュートブロックとシュートチェインの連携を徹底させている。シュートブロックとシュートチェインが出来る選手が多いし、戦略の幅も広がる。
こっちの世界だとオーバーライドっていう連携の方が主流らしいけど、オレ含む永世学園の選手は今のところ使えない。
「ぬ!?」
完全に必殺技を出すタイミングを見失ったモジャモジャＫＰは動けず、ボールはゴールネットを揺らした。
「ナイスゴール」
「ナイスパス」
オレと風介は拳と拳を軽くぶつけ合い、互いを褒め称えた。
とりあえず、これで同点だ。

○○

「鬼道さん、アレが言ってた……」
「ああ。アイツは1度見た必殺技ならすぐに模倣できる。条件は色々とある上、威力はオリジナルの半分くらいだがな」
水神矢から差し出された手を掴み、鬼道は立ち上がる。
「あれで、ですか？　僕には本物と遜色ないように見えましたが」
「ファイアトルネードは別だろう。あれはアイツが間近で見ていた必殺技だ。それに唯一、模倣した必殺技の中で練習しているらしいしな」
と言っても、やはりオリジナルの方が1枚上手だがな。と鬼道は付け加えた。
白撫亜嵐。一足先に海外へ挑戦した若き天才プレイヤー。
『変化自在のファンタジスタ』という異名を持つ彼の実力を再確認し、水神矢は少しばかりの恐れを抱いた。